

キラリと輝く多摩の歴史・文化・自然・現在を記録し発信するフリーマガジン



mico tama

帝京大学総合博物館
多摩のヨコガオ発見プロジェクト
フリーマガジン 2024 第7号

**TAKE
FREE**

公園で見つけたもう一人の自分

Nostalgia ～懐かしむ心～

落ち葉に埋もれて

秩父多摩甲斐国立公園東端を歩く





表紙写真

八王子市内、高尾 599 ミュージアムにて撮影。明治の森高尾国定公園の入口にある広場には、様々な人たちが集まり、思い思いの時間を過ごしている。(2022年4月23日)

本誌の編集について

本誌『ミコタマ』は、帝京大学総合博物館(帝京大学八王子キャンパス内)で展開中の「多摩のヨコガオ発見プロジェクト」の一環として作成しています。プロジェクトについては裏表紙をご覧ください。本誌の企画・取材・執筆・デザインは、帝京大学総合博物館の指導のもと、すべて帝京大学に在籍する学生が中心に行っています。

Contents

キラリと輝く多摩の歴史・文化・自然・現在を記録し発信するフリーマガジン



帝京大学総合博物館
多摩のヨコガオ発見プロジェクト フリーマガジン 2024 第7号

「ミコタマ」の名前の由来

ミコタマとは、ラテン語の「輝く」という意味のミコ (Mico) と多摩地域のタマ (Tama) を合わせた言葉です。キラリと輝く多摩の魅力の本紙を通じて記録し、発信したいとの思いを込めました。

帝京大学総合博物館について

本館は 2015 年 9 月に帝京大学八王子キャンパス内に開館した博物館です。帝京大学の持つ貴重な学術資料や最新の研究成果を、展示や講座などを通じて社会に広く公開しています。どなたでも入館できます。ぜひお越しください。

- Web サイト
<https://teikyo.jp/museum/>
- X(旧:Twitter)(@Teikyo_Museum)
https://twitter.com/Teikyo_Museum
- Instagram (@teikyo_museum)
https://instagram.com/teikyo_museum/
- YouTube
<https://youtube.com/channel/UCFAxT2oZoyFkrc3Sfu-Q>



まだ落ち葉が残っていた。かさかさとし小気味良い音を立てながら進んでいく(2023年12月27日 東大和公園撮影)

特集
公園で見つけたもう一人の自分

08 Nostalgia ～懐かしむ心～

昭島市立昭和公園

11 落ち葉に埋もれて

東大和公園 狭山公園

14 秩父多摩甲斐国立公園東端を歩く

— 祈りを見つげに —

御岳山 大岳山

.....

18 誰かのために精一杯やる

カサイ農機


22 ミコタマ通信

23 編集後記




 **東大和公園**
東大和市湖畔3丁目




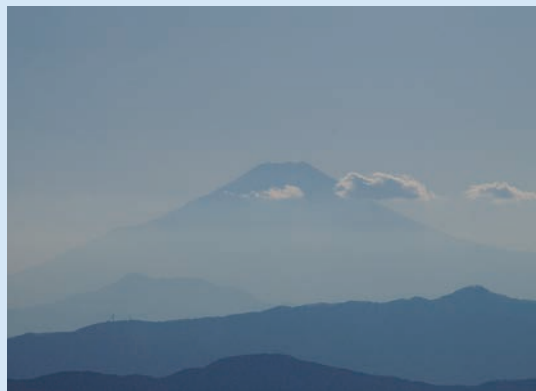
 **狭山公園**
東村山市多摩湖町3丁目17-19



 **昭和公園**
昭島市東町5丁目11-43



 **カサイ農機**
多摩市和田502-11



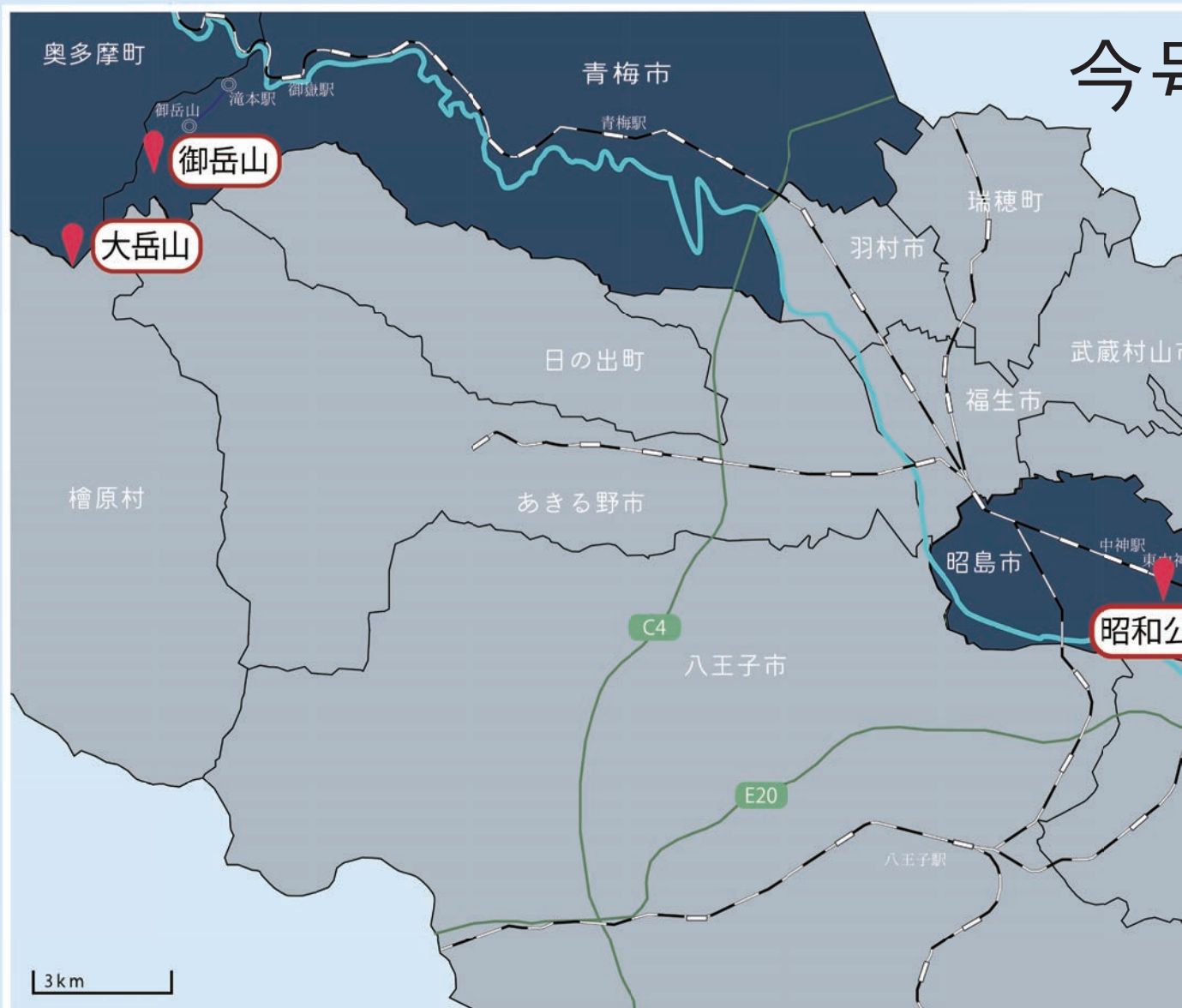
大岳山

西多摩郡奥多摩町海澤



御岳山

青梅市御岳山



※イラストは取材先のおおよその位置をあらわしています

※地理院地図（国土地理院）を加工して作成

特集

公園で見つけたもう一人の自分

最後に公園で遊んだ日はいつだったか、覚えていますか？

アトラクションのようでもくわくした小さな遊具たち、

ときには、沢山の友達と鬼ごっこやかくれんぼをしました。

忙しく過ぎる日々の中で私たちは、

そういった中の小さな学びを忘れかけているように思います。

大人になった今公園を訪れることで、何か新しい世界が見えるかもしれない。

そう考えた私たちは、多摩地域の公園を歩いてみることにしました。



狭山公園の小道（2023年12月27日）

Nostalgia

～懐かしむ心～



普段はスマホの画面ばかり見ているが、時にはスマホから目を離して過ごしたり、様々な人と触れ合うことも重要であると思う。それを実行するため今回は、三年生のミコタマ編集部メンバー三人で、JR東中神駅^{ひがしなかつみ}から5分ほど歩いた所にある昭島市立昭和公園を訪れた。この公園はメンバーの一人が、以前取材した五日市鉄道の廃線跡（ミコタマ4号掲載）と関連があり、気になっていた場所である。駅の改札を出ると、多摩地域のターミナル駅である立川駅からたった2駅にもかわらなく、人混みは無く、私たち以外に行き交う人もまばらだった。どこか懐かしく落ち着いた雰囲気があった。

※なお、今回の記事は、取材に行っていた三人が1Pずつ担当している。（下坂愛梨紗…8p、山崎柚夏…9p、荒井涼花…10p）

▲昭和公園での談笑風景



▲「ペーカリーなかむら」さん。東中神駅より徒歩10分ほどの場所にある

ペーカリーと鮮魚店

駅を出て歩きはじめ。時計はちょうど正午を指しており、お腹がすいてきた。近くで飲食店を探していると、親しみやすいオレンジ色の看板に惹かれて、「ペーカリーなかむら」というお店に入ってみた。な

かに入るとたくさん魅力的なパンが並んでおり、どれを購入しようか迷ってしまう。私（下坂）は、パン耳トマトグラタンタルトに決めた。購入後、快く取材許可を頂き、

お店の外観を撮影した。なぜこの看板なのだろう。

「ペーカリーなかむら」のお店と同じ建物内で、「中村屋魚店」が営業中だった。鮮魚店の店主は、「ペーカリーなかむら」の店主のご両親が営んでおり、鮮魚店の一部を改修して、パン屋を開いたそう。それを知ってから店舗を見るとまるで親子のようだ。

腹ごしらえ

お店を後にし、10分程歩いて昭和公園に到着した。まずは腹ごしらえをと考え、さっそく購入したパンを食べることにする。瑞々しいトマトと香ばしいパンの耳、サクサクしたタルトの味が合わさりとてもおいしい。もう一個買ってあげばよかったと思った。



▲実際に購入したパン。日光に照らされて鮮やかに映える焼き色。右上から時計回りで揚げコッペのシュガー、パン耳トマトグラタンタルト、メロンパン、コッペパンのチョコカスタード（自家製）

昔を思い出す

パンを食べて一息ついた後、私（山崎）は園内を一周した。すると懐かしいものを見つけた。それは色とりどりの遊具だ。私は、公園で遊んだ最後の記憶が中学生の時だったため、シーソーや、誰かが忘れていったおもちゃが置きっぱなしになっている砂場を見て、思わず興奮してしまっ

ると、メンバーの一人（荒井）が幼少期の公園にまつわるある思い出を話してくれた。「小さい頃、お父さんと家の近くの公園で遊ぶことが好きで、その日もいつも通り公園の砂場で遊ぶとしたんだよね。いつも使うお気に入りのスコップで砂を思い切り掘ったその瞬間、スコップにこんもりと盛られた砂に幼虫が混ざっていたのに気づいて腰を抜かしそうになってさ。しばらく砂場で遊べなくなったのも今となればいい思い出だよ」。

その話がきっかけとなり、思い出話にしばらく夢中になった。その後、私たちは、久しぶりに遊具で遊ぶことにした。まずは、珍しい形をしたシーソーへ。交互にシーソーを傾けながらくだらない話で笑い合う時間はとても楽しく、思いがけず時間が過ぎてしまった。次は何で遊ぶかと辺りを見回すと、青色のジャングルジムが目にとまった。私は、「せっかくなら上まで登ってみようよ」と二人を誘い、ジャングルジムの中に



▲シーソーではしゃぐ荒井と山崎

入って登ってみることに。すると、小さい頃はあんなに簡単に登れたのに、成長した私の体の大きさでは、ジャングルジムの中はとても狭く体を縮こませながら登った。

自分が想像していたよりも成長している事実にもう子供に戻ることはないんだと少し寂しい気持ちになった。久しぶりに公園で童心に返って遊んだことで日々の疲れが取れ、リセットされたことを実感すると同時に、一年生の頃からずっと一緒にミ



▲ジャングルジムに登る荒井と山崎

コタマの編集部の活動を頑張ってきた仲間と四年生になる前に思い出を作ることができたのがなにより嬉しかった。



▲公園を散策する下坂と山崎

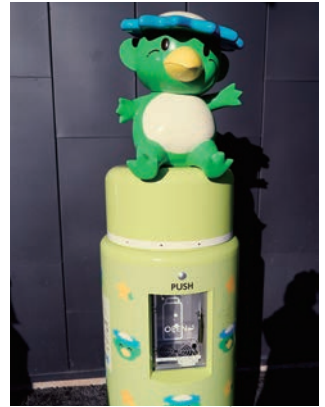


▲鉄棒の低さに驚く下坂と山崎

女性との出会い

遊具で遊んだ後、私（荒井）は公園で一人の女性に出会った。彼女は公園の近所に30年ほど住んでいるという。いきなり話しかけたにも関わらず、明るく明らかに、女性は私たちと話をしてくれた。この公園には、足腰を鍛えるための日課として散歩に来ているようだ。

昭和公園周辺について話を聞くと、彼女は20年前のこの辺りの様子について話してくれた。「そこに八清通り^{はっせい}ってあるでしょ。半分下町みたいな感じでね、年末年始なんかすごく混んでいて、活気があったの。今では考えられないけれどね」と、かつての賑わいを懐かしむように話してくれた。さらに、地元ならではの情報も教えてくれた。それは、東中神駅にある「カップの給水スポット」だ。そこでは、深層地下水100パーセントの水が無料で飲めるそうだ。深層地下水とは、山に降っ



▲東中神駅の給水スポット

た雨や雪が約30年という長い年月をかけてしみ込んだものだという。昭島市は、地下水から水道水を汲んでいる。そのため水がおいしく、水道料金が安いことも教えてもらった。

帰宅途中に立ち寄り、実際に水を飲んでみた。確かに、自分がいつも飲んでいる水道水よりおいしく、すっきりした味わいだ。女性と出会うなければ、素通りしてしまうところだった。

死ぬまで奪われることはない

また、女性は、私たちにこんな言葉を残してくれた。

「貴金属とか指輪は、無くしたり

奪われることがあるけど、大学四年間で培った学び、信頼とかは、自分が死ぬまで奪われることはないんだよ」。私は普段、学びや信頼について深く考えることはなかった。しかし、今まで生きてきたなかで、蓄積されたものは私の財産となることを

この言葉から学んだ。自分は一人生きていると思い込んでいたが、私の中にはすでに、永遠に一緒にいてくれるパートナーのような存在がいたことに気付いた瞬間だった。

昭和公園は不思議な公園だ。時間の流れがゆっくりと感じられ、日々の喧噪を忘れさせてくれる。そしてこの場で人々は何かを発見していく。

一人のメンバーにとっては、懐かしい思い出に浸れる場所であり、もう一人のメンバーにとっては、今の自分と静かに向き合うことで、新しい自分と出会うことができる場所であった。もし今後人生に迷うことがあったら、この公園に足を運んで

みようと思う、きっと何か生きるヒントにめぐり合うことができるだろう。

荒井涼花（史学科3年）
下坂愛梨紗（心理学科3年）
山崎柚夏（史学科3年）

|| 文・写真・デザイン



▲深層地下水100パーセントの水
▲お話を伺った自由広場



▲今回お話を伺ったOさん。非常に気さくな方だった



▲落ち葉に埋もれて遊ぶ、ミコタマ編集部メンバー



▲シンプルだからこそとてもおいしいと気付いた

みなさんは、外出中に目に入るものを意識したことはあるだろうか。例えば、自転車、車、信号、道路、標識、街路樹、空、飛行機、バイク、道を歩く人、川などである。そう考えると、生活していて目につくもの

の多くが人工物である。私は、普段生活する場所が市街地であるため、自然を目にする機会が少ない。そんな私のような人が気軽に自然に触れられる場所がある。それは「自然公園」である。「自然公園」とは自然の保護とレクリエーションの場であ

り、自然を学ぶ場所として自然公園法に基づいて指定される場所である。

気づけば私は、近所の公園にすら行かなくなっていたが、取材を機に東大公園と狭山公園の二つの自然公園に行くことにした。いつのまにか遠ざかっていた自然にふれあい、童心に返って遊んでみたいと思ったからだ。

つぎ、出発

私とミコタマ編集部メンバーは、西武鉄道武蔵大和駅で待ち合わせをした。向かう途中、榎本豆腐店えのもととうふてんと大きく書いた白と黒の建物が目に飛び込んできた。お店の入り口ではマスコットキャラクターの豆太郎が迎えてくれる。美味しそうな豆腐や揚げ物が陳列されている。奥には製造所が見えるようになっており、ちよūdō豆腐ドーナツを揚げていた。早速購入しお店の外で食べる。しっとりし、ふわっと豆腐の風味の



▲白がクジラタケ。
オレンジがヒイロタケ

とメンバーが、キノコがびっしりと道が続くままに歩いて行く。するするながら散策をする。

しながら散策をする。

道が続くままに歩いて行く。するとメンバーが、キノコがびっしりと



▲他にも生息している昆虫の説明などがあった

するおいしい、熱々のドーナツだった。

お腹の虫も鳴き止んだところで、最初に向かったのが東大和公園だ。スマホの地図に従って住宅地を通り抜けると入り口に到着。私は冬の森は茶色一色だと思い込んでいたが、緑を残す木々に驚いた。それもそのはずで、私たちがいた場所は「学びのエリア」という多様な林木を観察できるところだったのだ。

生えた枯れ木を見つけた。好奇心を刺激されたが触る勇氣は湧かなかつた。メンバーがこのキノコについて調べてくれたところ食べられない種類であった。

更に進むと背の高い木がまばらに生えた小さな丘に出た。丘からあたりを見下ろすと、公園に向かって走ってくる子どもたちの集団が目があった。どこから来たのだろう。

駆け回る子どもたち

丸太の階段を使って丘から降りていくと、先ほどの子どもたちが木で作られた遊具で遊んでいる。落ち葉を蹴って走り回り、アスレチックをよじ登って元気に遊んでいる。メンバーが引率者の女性を見て「一人で数十人の面倒をみるって大変だね」とつぶやいた。確かに数十人の子どもたちに気を配りながら、自由に遊ばせることは簡単ではないなと思った。しかし私は、楽しそうに遊び回る子どもたちをみて、緑に囲まれた

自然公園は、町中の小さい公園よりも季節を感じやすい環境であり、広いこともあいまって自由に遊びやすいだろうなと思った。

散策は続く

東大和公園での散策を終えると、多摩湖を横目にして貯水用の村上ダム上の散策路を歩き狭山公園に向かう。公園内に入ると、ランニングをする人、犬の散歩をする人、写真を撮る



▲東大和公園。学びのエリア

撮影する人など様々な人が自由に過
ごしており東大和公園より賑わって
いた。園道、芝生が整備してあり、
くつろぎやすさを感じた。一方で、
緑の多様さと静かさを求めるなら東
大和公園が適していると思った。ど
ちらの公園も近く訪れやすかった。
そのおかげで、同じ市内にある自然
公園にも違いがあることを知った。

ネコ降臨、カモの旅立ち

園内を散策中、目の端で坂の上の
ネコを捉えた。メンバーの一人が自
前のカメラですぐさま撮影を始め
た。私ともう一人のメンバーを置い
てけぼりにして、夢中で写真を撮る。
驚いて、猫がいなくなった後に、猫
が好きなか尋ねたところ、「普通。
犬も猫も好き」と返ってきた。初め
て行く自然公園にメンバーと一緒に
取材に行き、猫に出会うというイレ
ギュラーな状態が私に、メンバーの
知らない一面を見せてくれた。他に
も思いがけない出来事があった。

宅部池(たっちゃんいけとも言う)
を覗くとカモの群れがいた。ゆった
りと泳いでいたかと思うとどこかへ
と飛んで行ってしまった。初めてカ
モの飛び立つ瞬間を見ることができ
た。大きく羽を広げて水面を出たに
もかわらず、羽音が出ていなかっ
た。静寂に包まれながら一連の動作
の美しさに感動した。

忍者みたいな二人

さらに園路を進んだ先にある大き
な楓の木と落ち葉でいっぱい広場
に着くと、メンバーの一人がおもむ
ろに落ち葉をかき集め始めた。落ち
葉を山にすると、うつ伏せになった
メンバーに落ち葉をかける。全く姿
が見えなくなった。まるで忍者のよ
うに自然に溶け込むことができる遊
びだ。どっさり落ち葉がある自然
公園だからこそできるこの遊び。普
段おとなしいメンバーが遊び始め
て、いつのまにかノリノリでみんな
で遊んでいた。二人が口をそろえ

て「暑い」と言っただけに出てきた。
周りの目を気にせず、面白いと感じ
るままに公園で遊ぶのが久しぶり
で、懐かしいような新鮮なような感
じだった。これからも遊び心を持っ
ていたいと思った。メンバーの二人
がいつか、忍者になるのを見ること
ができるだろうか。

まだまだあるかも

自然公園には年齢制限はない。大
人になっても十分楽しめる場所であ
ることを実感した。はしゃぎすぎた
と思ったが、しっかり遊んだことで、
心身共にリセットされた感覚を覚え
た。

齋藤万愛(心理学科1年)

|| 文・写真・デザイン

北澤那由太(心理学科1年) || 写真

児玉悠斗(心理学科1年) || 写真



▲落ち葉を使ったこの遊び。なかなか楽しい



▲落ち葉をまんべんなくかける

秩父多摩甲斐国立公園東端を歩く

—祈りを見つけに—

「公園」と聞いて思い浮かぶのは、どのような場だろうか。遊具がたくさん置いてある場を想像するのが一般的なのかもしれない。もしくは芝生の整備された公園のようにくつろぐ場を想像するだろうか。

崇拜

今回、「公園」に関して取材することとなった時、かなり困った。なしる北海道から上京し、一年も経っておらず、土地勘が全くなかったからだ。考えあぐねたあげく、「山なら北海道のものどあまり変わらないだろう」と約二年ぶりの登山を決意した。

私が取材に行ってきたのは奥多摩町にある御岳山とおおたけさん。この山を含む地域は自然公園法に基づき「秩父多摩甲斐国立公園」に指定されており、ここも公園といえる。

また、御岳山は山岳信仰の対象となっているそうだ。そもそも山岳信仰とは何か。自然崇拜の一つであり、山そのものを信仰の対象とする

宗教だ。平安時代になるとこれらが宗教として体系化され、山を拠点とした修験道が生まれる。さらに江戸時代になると山岳信仰が大衆に受け入れられ、巡礼などが流行し、日本人の信仰対象としての重要な地位を占めるようになったという。御岳山は現在でも信仰の対象とされており、山頂には神社があり、宗教者に限らず多くの人々が訪れるそうだ。

当口

JR青梅駅から「東京アドベンチャーライン」（青梅駅から奥多摩駅間の愛称）というなんとも楽しい愛称が付けられた路線に乗り、御嶽駅に降り立った。12月末ということもあり、足元には霜のおりた植物がちらほら見受けられた。駅から出ると多摩川が勢いよく流れてお

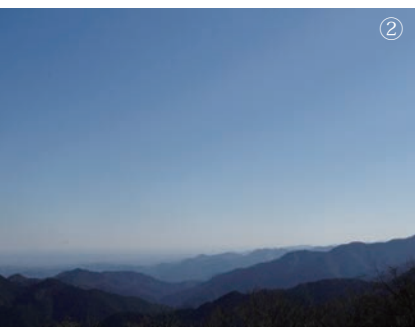


▲秩父多摩甲斐国立公園

▲大岳山からみた富士山



①



②



③



- ①御岳山から大岳山の道中にある七代の滝
- ②御岳山展望台からの眺め
- ③武蔵御嶽神社の本殿
- ④散策した道

＜参考文献＞

『出羽三山 山岳信仰の歴史を歩く』P1～4 岩波書店 2017

り、壁のような山が眼前に広がっていた。ここまで上流に来ると私がよく見かける中流のように護岸工事がされておらず、大きな岩が露出している、「これこそ川!!」という景色だ。御岳山に登るためにはバスに約10分乗車し、山の玄関口であるケーブルカーの「滝本駅」を目指す方法もあるが、今回は40分ほど歩くことにした。すると大きな鳥居が見えてきた。信仰の山であることを実感する。途中、滝本駅行きの満員のバスが数台追い抜いて行った。ぎゅうぎゅうの満員であった。

ケーブルカーに乗車すると、約九分ほどで山の中腹にある「御岳山駅」に着いた。ここから30分程度歩くと山頂へ至る。登山道はコンクリートで舗装されており、はじめての登山でも安心だ。登山道の所々に御岳山の自然についての説明看板があり、博物館のようで楽しい。山頂まであと少しという所には商店や宿坊が建ち並ぶ参道にたどり着いた。宿坊は今も多くの人が宿泊するようで、信仰の山は現在も生きている。参道を抜け、石段を登っていると巨大な建物が見えてきた。武蔵御嶽神社だ。その社殿はとて山頂に建っているとは思えないほど大きく、煌びやかだ。境内の奥に入っていくと、たくさんの神様のお社が建っており、信仰の山だとは知っていたが、圧倒された。お社の一つに「大口真神社」という神社があった。ここにはニホンオオカミを神格化した大口真神という神様が祀られている。武蔵御嶽神社はこの神様を守り神としており、その証として狛犬はニホンオオカミとなっている。御嶽神社を後にし、次の目的地の大岳山へと向う。急こう配を下って行った先には大小八段の滝が構成されている七代の滝が待っていた。小さくはあったが、不思議な存在感があり、「滑落に注意」の看板の為かもしれないが不気味にさえ感じた。そのまま沢沿いに行くと尾根に出る。この道は紅葉の時期に来ると岩と紅葉のコントラストでさぞ綺麗なことだろう。その尾根を伝っていくと、大岳山頂へ続く登山道へ出る。大岳神社がみえてきた。煌びやかさは無いが、かえって静謐さを生んで

おり、背筋が伸びるような雰囲気だ。この神社もニホンオオカミを守り神としていた。神社前は広場のようになっていた。岩をよじ登っていくとついに山頂に登頂した。山頂からは私の住んでいた北海道ではあまり見られなかった、山脈が折り重なっているような展望が広がっており、視界の中の山々も国立公園の一部と思うと、圧倒された。

今回、山道のいたるところで信仰の気配を感じた。私の登った事のある山からは感じ取れなかった気配だ。自然の中に、人工物と言えるほどのない人の気配が混ざった不思議な感覚を味わうことが出来た。

児玉悠斗（文学部心理学科1年）
 Ⅱ文・写真・デザイン

都市公園からは、ゆったりと穏やかな時間と新しい人生の学びを、

自然公園からは、遊びのなかにある学びを、

国立公園からは、遊びと信仰の不思議な時間を知ることができました。

毎日遊んでいた遊具は、体が大きくなり、

登ったり、滑ったりすることが難しくなっていました。

公園に訪れることで寂しさを感じる一方、

大人になったからこそ見つけられる景色がありました。

ときには子どもに戻って、ときには大人のまま公園に訪れてみてください。

あの場所はいつでもきつと、新鮮な驚きと発見をくれるはずです。





▲農機具を持ってポーズをとっているのは、お話しを聞いた笠井信男さん。カサイ農機を中心だ（掲載した写真の撮影日はすべて2024年1月24日である）

誰かのために精一杯やる

多摩ニュータウンの住宅街のど真ん中にある「カサイ農機（正式名称は（有）カサイ）」は家族経営の小さな農機具店だ。6畳ほどのプレハブの事務所には、ひっきりなしに近隣の農家さんから様々な依頼が舞い込む。その依頼を1件、1件、丁寧に正確に対応する笠井信男さん（42歳）。そこには、笠井さんの熱い思いがある。

農家の非常勤設備担当

「農機具店は、農家の非常勤設備担当みたいなもんです」と笠井さんは言う。もしくは、「農家のサポーター」と言ってもいいかもしれない。ほとんどの農家は、個人事業主のため種まきから出荷までの各工程をすべて自分でやらなければならない。その過程で作業の効率化のために農機具を使う。機械はメンテナンスや修理が必要だ。しかし、農家は決して機械の専門家ではない。そこで「非常勤設備担当」である農機具店の出番となる。笠井さんが営むカサイ農機も同じく、その役割を担っている。

農機具店の仕事は家業だそうで、笠井さんのお祖父さんが戦後すぐに始めたとのことだ。現在のスタッフは笠井さんと、笠井さんの父と兄そして笠井さんの友人の計四名。事務所は笠井さんの自宅の隣に設置された六畳ほどの小さなプレハブだ。ここに連日、様々な依頼が舞い込む。



▲事務所から、車で5分程の場所にある、倉庫兼作業場。
笠井さんが使う、道具や、農機具の在庫が綺麗に整理され保管されている

農具の注文や、機械の修理についての問い合わせの他、過去には近隣の小学校から学校に保管されていた古い石臼を使えるようにしてもらいたいという相談もあったそう。その仕事の範囲にびっくりする。

大変な事は、機械は急に壊れるので、いづどんな仕事の依頼があるか分からない事だそう。しかし、「農機具を修理できる人は、そう多くはないと思うんです。誰かがやっている」とみんな便利だろうからと思っているながら頑張っています。そういったところが農家の人に伝わってくれば本望ですよ」と穏やかに語る笠井さん。その言葉の奥には、自分の出来る事、得意な事を通して、農家の役に立てればという笠井さんの熱い思いがある。

仕事の依頼は、多摩地域だけにとどまらない。数日前には横浜市緑区から依頼があり、車を走らせ駆け付けたそうだ。「呼ぶ声があれば、一時間半までは頑張ります」と軽やかに

に笑う笠井さん。きっと、笠井さんは困っている人がいれば、たとえ二時間掛かっても出張していくのだろう。

強い心があれば

「農機具の修理の依頼を受けるからには、必ず直さないといけないプレッシャーが人知れずあります」と話す笠井さん。プレッシャーは相当なものだそうで、肉体的にも精神的にも大変な仕事であることがうかがえる。だが、笠井さんは、「重量物を運搬し、死にそうになった話」や「なかなか機械が直らず、農家さんから叱られた話」など、びっくりするような話も冗談を交えて笑いながら話す。そのタフさはどこから来るのだろうか。詳しく聞くと、笠井さんは20代の頃、カット野菜を専門に加工する大手の食品会社の工場で働いていたそう。そこで様々なことを体験したそう。約20年前、18歳でアルバイトとして工場の仕事を始め

ると、仕事の飲み込みの速さなどを
買われて、契約社員になり、そこか
ら正社員に登用され、そしてなんと
23歳ぐらいの頃には管理職に大抜擢
されることになったそう。とんで
もない大出世だ。しかし、管理職の
仕事は激務で、労務管理から、経理
関係、さらにトラブルの処理等、あ
らゆる仕事をこなしていたそう。
聞いていると胃が痛くなりそうにな
る。笠井さんのタフさはそれらの経
験から培われたのかもしれない。

サラリーマンとして働いていた笠
井さんが、カサイ農機に転職したの
は、今から約10数年前の事。すでに
カサイ農機で働いていたお兄さんか
ら一緒に働かないかと誘われた。大
きな組織に属さないで家族と共に働
く選択肢もあると考え、笠井さんは
会社を退社し、カサイ農機のスタッ
フとしての人生を進み始める。工業
系の学校の出身で機械には慣れてい
た笠井さん。しかし、そこで待って
いたのは農機具の洗礼だった。修理

の依頼を受けて見に行ってみると初
見のものばかり。というのも、農機
具は、目的に合わせて、とんでもな
い数の種類があるためだ。もちろん
説明書などは現場にない。

そんな時、笠井さんが最初にする
事は、基本に立ち戻り、その機械が
何の目的で使われていたのかを確認
する事だそう。これが、機械を直す
ために一番大切な事だそう。笠井
さんの話を聞いていると、私のよう
な機械オンチでは農機具店のスタッ
フは務まらない気がしてくる。そ
の感想を伝えると、「どうでしょう。
ハートじゃないっすかね。強い心が
あれば。そうそう、あんまり真面目
に考えない方がいいかもしれないで
すね。全部覚えるのは無理なので、
出たところ勝負で、受動的に一所懸命
やれる人が向いてるでしょうね」と
笑い飛ばす笠井さん。その姿は物事
を柔軟に捉える感覚がいかに大切に
を教えてくれる。



▲農機具のエンジン音を聞き、
機械の調子を確認する



▲娘さんと、そのお友達と談笑する笠井さん。
地域に溶けこんでいることがわかる場面だ



▲会計帳簿をパソコンに入力することも
笠井さんの仕事だ

地域のサポーターとして

事務所から、車で五分程の場所に倉庫兼、作業場がある。中を見せて頂いていると、外から話し声が聞こえる。出てみると笠井さんと、中学生達が談笑している。聞くと笠井さんのお子さん、その近所のお友達とのこと。昨年、笠井さんは日常に変化が欲しかったという理由で、お子さんが通っている小学校のオヤジの会に入ったそう。そのため、学校に出入りするようになった。それ以来、笠井さんは小、中学生の顔なじみなのだ。オヤジの会の活動としては、学校内の森の整備をするなど、学内のボランティアを行っている。これは、まさに笠井さんの得意分野だ。「本格的な作業道具を持って学校に参上すると、さすが農機具屋さんと言われます」と笠井さん。地域のサポーターとして誰かの役に立てる喜びを、はにかみながら恥ずかしそうに話す。

農地が無くなって本当にいいのか

カサイ農機のホームページにある。「農業があつての農機具、農業をより良く継続してゆく為の農機具……そんな農家さんを支える農機具屋と考えます。」農家のサポーターに徹するという笠井さんの姿勢を感じる事ができる言葉だ。

そんな思いを持つ、笠井さんの立場から見ると、都市部にある農業はどんな課題があるのか聞いてみた。すると「ゴールがドボンのすぐろくをやっているようなもの」と独自の比喩で表現する。実は両親から農地を相続し、農業を続けたくても、相続した農地に掛けられる高額な相続税を払う事ができず、売却するしかない事が多いのだ。この状況が続くと、都市部から農地がなくなってしまふ。かつては、農作物の生産の場と人々が生活する場は、ひとつだった。現在でもそのような地域はあるが、都市部では生産の場がどんどん

なくなっている。

「農地が無くなって本当にいいのか。食べ物を作る機能がないエリアで生活することは、人が生きる上で何か勘違いしないかと思うんです」と笠井さんは話す。そう言われてみると、自分たちが口に入れる農作物が、どんな場所で誰の手でどのように栽培されているのか知らない事に気が付く。さらに農地は、農作物の生産の場だけではなく、緑地としての役割を果たしたり、五穀豊穡を祈る祭りや、芸能などの伝統文化の中心としても機能している。農地は、私たちの生活や価値観の形成に、計り知れない影響を与える存在であり、それを手放すことは、人間にとって大きな痛手であることを、笠井さんの問いかけは気付かせてくれる。

* * *

笠井さんは「理屈でやっても上手くいかないのかもやっぱりあって、一番なのは人間関係ですよね。人な

んで結局」と話す。人とのつながりを大切にすると笠井さん。そんな笠井さんの話を聞いていると、私は実家の事を思い出す。私の実家は群馬県で亡き父を中心に農業を営んでいた。来客の少ない家だったが、つなぎの作業着を纏った方が時々訪ねてきて農機具をいじっていた。今思い返すと、おそらく農機具店の方が、もしくは農協の方だったのかもしれない。どちらにしても、農機具の修理を行っていたようだ。私の父は、普段は口数が少なく、あまり人を信用しようとしないう寡黙な人だったが、その方には気を許しているようだった。私もその人物に懐いていた気がする。おそらく、父が気兼ねなく相談できる数少ない人だったのだろう。もしかしたら、笠井さんのような、人とのつながりを大切にしたい人柄の方だったのかもしれない。いつでも誰かのために精一杯やる笠井さん。その思いを胸に、今日もトラックを走らせて農家の元へ向かう。

堀越峰之(帝京大学総合博物館学芸員)

|| 文・写真・デザイン

● ミコタマ各種 SNS



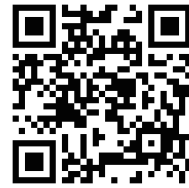
X(旧 Twitter) ユーザー名 ↓
@Teikyo_Micotama



Instagram ユーザー名 ↓
teikyo_micotama

Twitter と Instagram を開設しました。刊行のご連絡や本誌設置場所の告知、記事で使用されなかった写真の掲載等をしていきます。SNS を通じて読者の皆様にミコタマをさらに身近なものに、また、私たちの活動をより深く知っていただける機会を広げていきたいと思ひます。ぜひフォローよろしくお願ひいたします！

● アンケートへのご回答をお願いします！



アンケートの URL ↓
<https://forms.gle/8ozD3WT6Fqq3t15z6>

本誌の読者の皆様からご意見・ご感想を受け付けています。本誌をより良い記事にするため、また、皆様との繋がりを持ちたいとの思ひからアンケートを作成しました。アンケートの回答時間は最短で1分程度です。上記の QR コードまたは URL をご利用の上、ぜひご回答よろしくお願ひいたします！

● 帝京大学の広報誌『Flair』の取材を受けました



帝京大学の広報誌である『Flair』129号の取材を受けました。普段は取材を行う側ですが、取材を受けるという貴重な体験を得られました。さらに多くの方に『ミコタマ』の活動を知っていただければと思ひます。

『Flair』129号は3月27日発行予定です。

● 『ミコタマ』配送について

配送を承ります。

ご希望の方がいらっしゃいましたら、
帝京大学総合博物館までご連絡下さい。

※送料のご負担をお願いいたします
在庫の無い号もございます

帝京大学総合博物館

多摩のヨコガオ発見プロジェクトフリーマガジン
『ミコタマ』編集部
〒192-0395
東京都八王子市大塚 359 番地

<https://teikyo.jp/museum/>
TEL 042-678-3675
E-mail museum@teikyo-u.ac.jp



帝京大学総合博物館
多摩のヨコガオ発見プロジェクト
フリーマガジン 2024 第7号

発行
帝京大学総合博物館

編集長
児玉悠斗
広野楓花
甲田篤郎

編集・デザイン
荒井涼花 (6-7,10,16-17,23)
下坂愛梨紗 (8)
山崎柚夏 (9)
小島七菜 (6-7,16-17,23,24)
北澤那由太 (23)
児玉悠斗 (1-5,7,14-15,22-23)
斎藤万愛 (6,11-13,16-17)
広野楓花 (4-5,6,16,23)
堀越峰之 (18-21)

※ () は担当ページ

ロゴデザイン
寺澤頼来
小島七菜

特別協力
都留文科大学 地域交流センター
フィールド・ミュージアム部門
『フィールド・ノート編集部』

校閲・管理
川北友美
甲田篤郎

印刷・製本
株式会社インフォテック

発行日: 2024 年3月29日
発行部数: 1400 部

発行 / 編集
〒192-0395
東京都八王子市大塚 359 番地
帝京大学総合博物館
多摩のヨコガオ発見プロジェクト
フリーマガジン『ミコタマ』編集部

Mail
museum@teikyo-u.ac.jp

Web サイト
<https://teikyo.jp/museum/>

X(旧 Twitter)(@Teikyo_Museum)
https://twitter.com/Teikyo_Museum

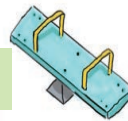
© 2024 『ミコタマ』編集部
乱丁・落丁の場合はお取り替えいた
します。編集部までお知らせください。

23  2024 第7号



編集後記

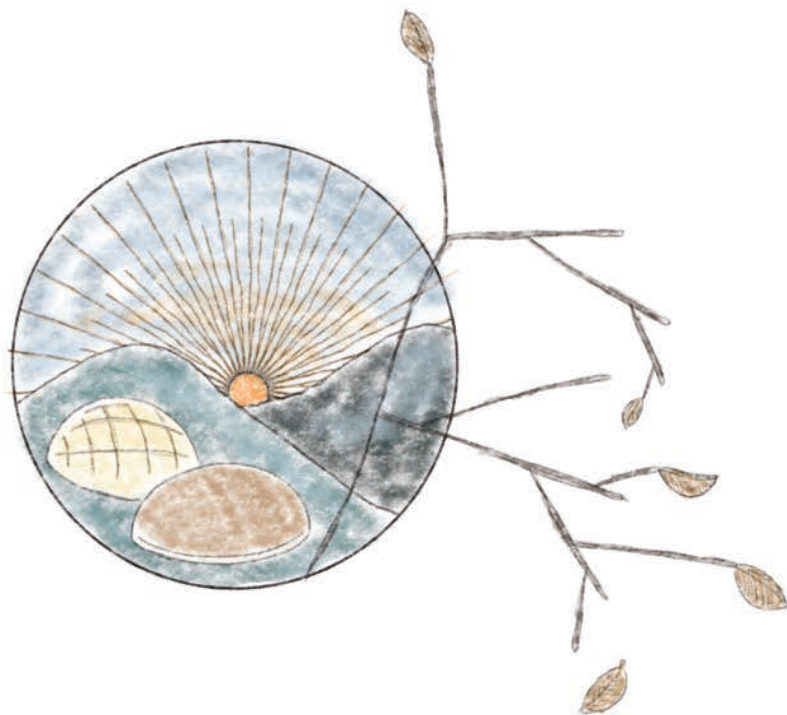
「公園」



子どものころから、私はブランコをこぐことがとても好きです。風のようにどこまでも、遠くへ行けるように感じるからです。ブランコが空高く舞うその瞬間は、目に映る景色がいつもよりきらめいているように見えました。大人になった今、ブランコをこぐ機会はそう多くはありませんが、^{ざいた}座板に腰をのせ、チェーンを握ると子どものころの何気ない思い出や、そのときの溢れ出るような喜びや楽しみが蘇ります。研究や就活など、せわしなく続く毎日のなかで、ささやかな幸せを見逃さずに生きていきたいです。(荒井涼花)

うき足だったまま駆け出し、派手に転んだときの心が底冷えする感覚は、大人になってからの方がより強くなった気がします。子どもの頃より世間に擦れ、転んだ瞬間からすべきことを考え始めてしまうからでしょう。あの頃のように人前で大声で泣くことは、いつしか難しくなりました。泣いている暇が無くなってしまったようにも捉えられて、なんだか虚しいです。虚しさを埋めるだけの生活は、頭痛のようにつまらない気がします。そんな生活を送るより、あの頃公園で泣いていたときも心の片隅にあった、絶対的な暖かさを覚えて日々を過ごしたいと思いました。(小島七菜)

えん(縁)は至る所で感じ取れます。よくある遊び場やふと立ち寄った場所での出会いが、かけがえのない関係となることもあります。その中でも、利用者を問わない公園は私にとって特別な場所です。もちろん、学校や職場でも素敵な出会いはあります。しかし、放課後に公園で様々な学校・学年の友達と遊んだドロケイやサッカーは学校とはまた違う縁が生んだ、大切な思い出です。過去の自分と同じように公園で遊ぶ子どもたちを見て、かつて遊んでいた友人たちのことを思い出しました。(北澤那由太)



帝京大学総合博物館 多摩のヨコガオ発見プロジェクト

帝京大学八王子キャンパス周辺の自然、文化、歴史、現在に関する魅力を、帝京大学総合博物館が調査したことをもとにして広く社会に紹介するプロジェクトです。

「赤駒を 山野に放し 捕りかにて 多摩の横山 徒歩ゆか遣らむ」(万葉集)

放牧してある赤駒を捕まえることができなくて、険しいという「多摩の横山」を(防人に赴任する夫に)歩かせてしまうことになったよ。

この歌は、奈良時代に編まれた「万葉集」の歌の一つです。「防人」として武蔵国を離れて九州に赴任する夫を妻が気遣った歌です。「多摩の横山」と呼ばれる場所は、ちょうど帝京大学八王子キャンパス周辺にあたります。丘陵が、横に長く連なる様子を当時の人々は「多摩の横山」と呼びました。万葉集の頃の「多摩の横山」の面影は、現在は少なくなりつつあります。ですが、しっかりと目を凝らしてみると過去の面影を感じ取ることのできる場所が残っています。そして、それらの場所には過去から現在までの人々の営みが連綿と続いています。このプロジェクトは「多摩の横山」に残された自然や文化、歴史、そして現在の人々の営みに光を当てて紹介するものです。普段は何気なく通り過ぎて気がつかない魅力あふれる「横山」ならぬ「多摩のヨコガオ」を探して記録し、社会に発信していきます。